

綴方教育と『綴方指導細目』

明祥中学校3年 浅井 菜穂子

綴方教育と『綴方指導細目』

明祥中学校 3年 浅井 菜穂子

1 はじめに

私は、社会の授業で大正デモクラシーと文化という課題に取り組みました。将来私は教育に関する仕事に就きたいと思っているので安城市の義務教育について調べました。私はその中でも新教育運動の影響を受けたといわれる『綴方指導細目』という書物に興味をも、そこで、綴方教育と『綴方指導細目』についてより深く知りたいと思い調べてみました。

2 「綴方」とその歴史

「綴方」とは文章を綴ることをいいます。現在の国語の作文と同じ意味合いになります。そこで綴方・作文の歴史について調べてみました。

(1) 国語科の誕生以前の作文教育

明治前期は、模範として示される文章と同じように書けることが目指されていました。その指導内容は模範文になら、て物事を説明する文章や実生活で必要とされる手紙文の形式指導だ。そのため、子どもが自由にテーマや形式を決めて文章を綴ることは行われていませんでした。

(2) 言文一致体の普及と国語科の誕生

明治20年代以降になると二葉亭四迷の『浮雲』など、口語体を用いた作品が発表されるようになりました。多くの人が言文一致に関心を持つようになり、教育にも影響を及ぼすことになりました。

その後、言文一致体は社会や教育界にも影響を与え、明治33年

(1900)の「小学校令施行規則」が定められました。規則では、「読み方、書き方、綴り方」からなる「国語科」が設けられるとともに、「作文」ではなく「綴方」という名称を用いることになりました。

綴方は次のように示されていました。

〔綴方について〕

文章ノ綴り方ハ、読み方、又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケラル事項、児童ノ日常見聞セル事項、及処世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ、其ノ行文平易ニシテ、旨趣明瞭ナランコトヲ要ス。

このように綴方では児童の日常生活に関することを題材とすることが示されました。また、この規則の規定は、その後の教育にも大きな影響を与え、教育の現場でも多様な実践が展開されることになりました。

(3) 綴方教育と芦田恵文助先生

大正時代に東京高等師範学校附属小学校の教員であった芦田恵文助は、綴方教育について、児童に自由に綴らせるという「随意選題」を提唱しました。

この「随意選題」による綴方教育は、「無指導」のもとで自由に綴らせるという指導ではなく、児童が採らした文題を授業内で複数人数に発表させた上で、各自が選んだ文題について綴り、授業でその文章を批評して誤りを正すとともに、その長点や欠点を見つけ出す、といった順序で綴方教育を行うというものでした。これは、子どもに内面する「発達する力と理想」を伸ばすことが「指導」であり、「児童に『発達』を自覚、させることを目指していた」ものでした。

この「随意選題」による綴方教育論は、その後の綴方教育にも大きな影響を与えました。

(4) 関係年表

年代	国語(綴方・作文)の歴史	義務教育の歴史
明治5年(1872)		学制の公布、尋常小学校が設置される
明治19年(1886)		尋常小学校の義務教育が3〜4年になる
明治20年代以降	言文一致の文学作品が発表される	
明治33年(1900)	小学校令施行規則で「国語科」が設けられる。作文が綴方となる	尋常小学校の義務教育が4年に統一 検閲科が無償化される
明治40年(1907)		尋常小学校の義務教育が6年になる
昭和16年(1941)	国語科が国民科に統合	尋常小学校が国民学校に改められる
昭和22年(1947)	学習指導要領で国語科が復活	教育基本法・学校教育法が公布 小学校6年・中学校3年になる

3 『綴方指導細目』について

『綴方指導細目』とは、大正14年2月に桜井第一尋常小学校(現在の宮城県立桜井小学校の前身の一つ)の長谷部正信先生が書いた綴方教育に関する資料です。同尋常小学校の綴方授業で用いる指導案が記されています。

(1) 綴方指導についての長谷部先生の考え方

長谷部先生の綴方指導についての考え方は『綴方指導細目』の「はしがき」に次のように記されています。綴方指導を通じて児童の内面の成長が促され、その成長が自覚されるとの主張が読み取れる箇所について、原文に私が表線を付けてみました。

はしがき

(一) 細目編纂に対する私の立場

綴る力を伸すにはなるべく多くの文章を読ましめることが肝要です。読むことにより、作者の生活が拡張され、従って生命の伸展が促されることとします。

児童に向かひ、多く読め、では割合に効果が薄い。より多くの価値を収めんには読むこと(批評鑑賞)の指導をしなければなりません。

如何なる材料を如何に批評鑑賞させるかは綴方に於ける研究の重要な方面だと考へられます。

(1) 批評

文章批評とは作品を通じて作者の見方考へ方を評価し、或は表現上の苦心並に其の表現形式等を価値判断するのであります。便宜上二つに分けて

客観的方面 = 知的に作品を価値判断すること。

(これには規範となるものを要する)

主観的方面 = 文章を読んで自ら内に得た自己の印象感想を標準にして価値判断すること。

(従来も板上訂正共同批評などが行はれていましたけれども、多くは客観的方面(表現形式の一部)であつて、それも作者の立場を離れたものでありません。

(2) 鑑賞

文章鑑賞とは作品の善美を通じて作者の生命に触れ、そこに言ひ得ぬ趣味を覚ゆることとあります。

これも前同様二つに分けて

享樂 = 読後に来るべき綜合的の情味

鑑賞 = 分析的に知的に作品に価値づけること

(批評と同時に来るもの)

批評も享樂も鑑賞も個々別々でなく一団となつ有機的に行はるべきものであります。

(3) 批評鑑賞の創作に及ぼす効果

批評鑑賞によつて読者は作者の見方考へ方表現の妙味並に其の苦に手法などを会得する即ち、

イ、自己の欲するものが引出される。

ロ、内面に潜むものが自覚される。

ハ、把握しやうとしたものが形づけられる。

二、未知の世界が眼前に展開され憧憬の境地に遊ぶことが出来る。

要するに綴方の指導は板上訂正や板上批評のみでなく、主として批評的な直接指導のあることを考へなければなりません。

(4) 批評鑑賞に於ける注意

批評鑑賞の創作に及ぼす効果は此の如くであります。
さて其の材料の選択と方法のよろしきを得なかつたならば
却って取りかへしのつかない災害を来すのであります。

材料に於ける注意

イ、適切な材料

同一実感を有する

同程度位(及ビコレに近キモノ)

ロ、目的の明かなもの

方法上の注意

イ、作者の人格を重ずること

ロ、作者の立場をはっきりして後に...

ハ、議論の為めの議論にならず其の目的を明にすること。

(2) 指導細目の具体例

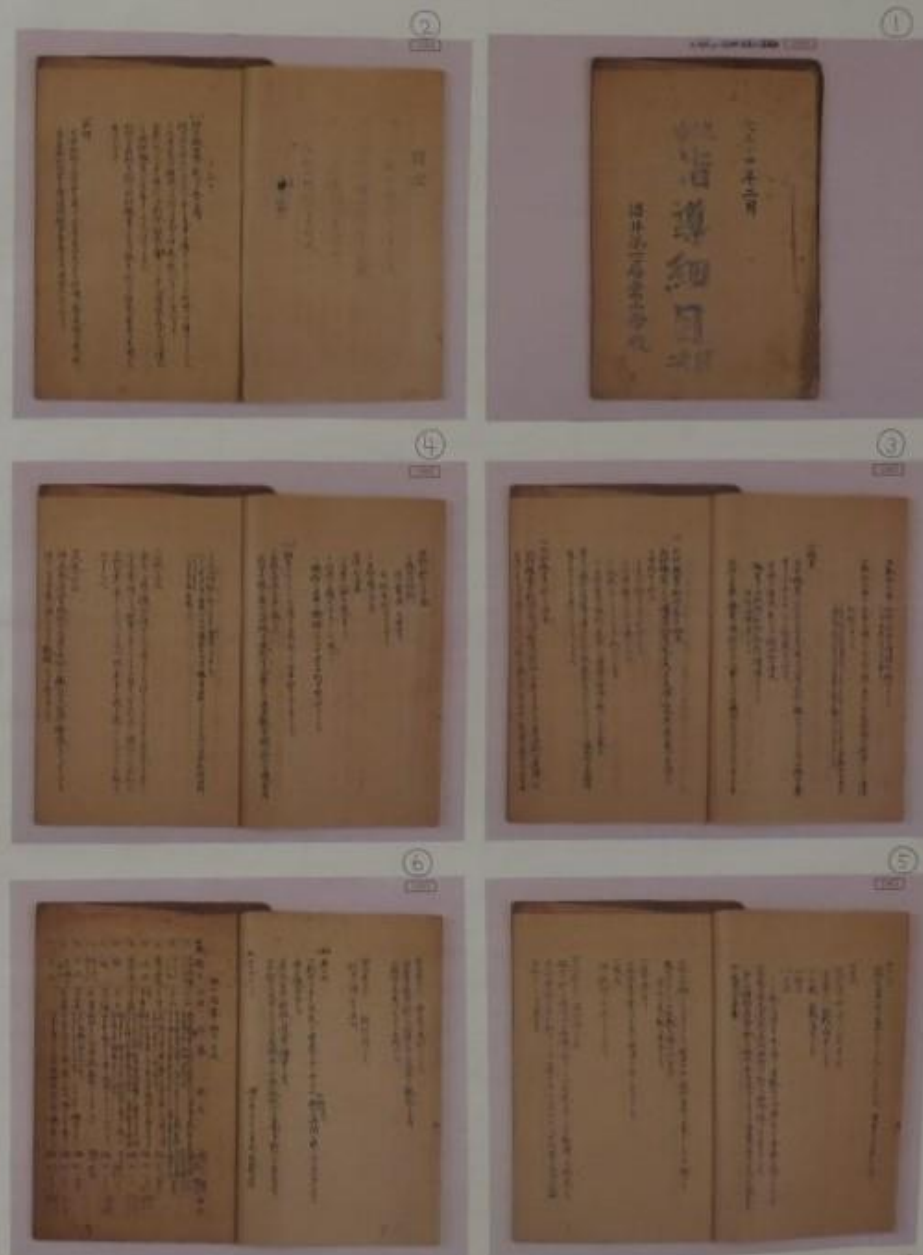
『綴方指導細目』には綴方授業で用いる読んで批評鑑賞するための作品が整理されています。収められている作品としては、村井第一尋常小学校の児童の作品などが多く採用され、指導上の要点やその作品の標準での適用学年などが整理されています。作品そのものは別冊であったため内容は分かりませんが、作品の細目目次によって具体例を一つ挙げると次のような整理がされています。

- ・ 題目：「お宮の松の根にこしかけて」
- ・ 作者：13 六、一、弘 (注)
- ・ 指導要点： 全篇象徴描写に近い単なる写生文でなくして
景色なる材料を借りて自己を表現している。語調、
語感共に可。
- ・ 適用上の注意 新理想主義に立つ写生文の適例
- ・ 適用学年 六年以上

(注) 大正13年 6年1組 稲垣弘さんのこと。

『綴方指導細目』の冒頭部分

資料提供 安城市歴史博物館所蔵 村美代子家資料



(3) 長谷部先生と芦田先生

『桜井の小学校誌』によると、長谷部先生は芦田恵之助先生の教育論を幅広く研究されていました。『綴方指導細目』も芦田先生の綴方教育論の影響を強く受けて書かれたものと考えられます。昭和18年には桜井村で教育研究会が開催され、芦田恵之助先生が講師として招かれています。

4 現代の国語の作文指導と『綴方指導細目』

明祥中学校で国語を担当されている山崎理恵先生に、国語の作文の指導で重視されていることや、『綴方指導細目』の考えかと現代の国語の作文との共通点について伺ってみました。

Q: 先生が国語の作文指導をするときに大切にしていることはなんですか？

A: 私が一番大事にしていることは「自分の気持ちに寄り添ってそれを言葉にする」ということです。自分と向き合って、自分が気づいていないことに気づくことが大事だから、自分の気持ちに正直に書いてみてほしいです。

Q: 『綴方指導細目』の考え方について聞いてどう思われましたか？

A: 私が納得しているところは四つあって、一つ目は文をたくさん読むことです。文を書くため、自分の気持ちに一番合う言葉を探すには言葉をたくさん知ることが大事だと思うからです。二つ目は批評です。文章を書くためには、どういう観点から文の価値をとらえるかが大事になるし、客観と主観に分けているところも良いと思いました。三つ目は鑑賞です。『ひろは』を読んでもらったりして文章の良いところに触れてほしいと思います。四つ目は作文の直接指導です。私の授業では、私のところに来てもらって一人、一人にアドバイスをしています。

Q: 『綴方指導細目』の綴方の考え方と、現在の国語の作文の指導方法を比較したときに、共通点はあるのでしょうか？

A: 共通点は文をたくさん読むことと、自分の作文の材料として他の作品の鑑賞をすることです。基本的なことは現在もあまり変わっていないように思います。

5 おわりに

私は今回の一人一研究で、『綴方指導細目』という約100年も前に書かれた書物の考え方が、現在の国語の作文の考え方と大きく変わらないことに、とても感動しました。資料を読んでいると著者と会話ができていようで、それがとても楽しかった。長谷部先生は、文の表現技法だけでなく、綴方を通して児童自身が素直な気持ちで表現できる楽しさを知ってもらったかたのではないかと思います。

今も昔も先生が児童・生徒に授業をするまでに、研究授業や発表会を通して、よりよい授業をするためにたくさん努力してくださっているということを取材を通して改めて知りました。今まで計8年間受けてきた授業は、当たり前のようで実は当たり前ではないということを再確認することができ、とても良い機会になりました。私は、歴史の中の方々が苦学したり、工夫したり、悩んだりしたことが、今につながっているということをも、たくさんの人達に知ってほしいと思います。

(参考文献)

- ・安城市史編集委員会編『新編安城市史3 通史編近代』安城市 平成20年
 - ・安城市史編集委員会編『新編安城市史7 資料編近代』安城市 平成18年
 - ・杉山実加『昭和初期における表現指導を重視した綴方教育の展開に関する研究』早稲田大学 平成29年
 - ・安城市歴史博物館編『企画展 勉強、ておもしろい。指定管理者 安城文化のこども館 共催 令和4年』
 - ・安城市立桜井小学校編『桜井の小学校誌』安城市立桜井小学校 昭和56年
 - ・相賀徹夫編『日本大百科全書』小学館 昭和59年
- (資料提供)
安城市歴史博物館所蔵 林美代子家資料『綴方指導細目』